プラトン『国家』篇研究

米谷翔太

本論考では、プラトン（427-347 BC ）の中期対話篇の一つである『国家』篇を取り上げ、そこで展開されている魂」を中心に、プラトン中期哲学の特質を明らかにしていく。

『国家』篇では、ソクラテスが、ポレマルコス、トラシュマコス、アデイマントスやグラウコンといった人々を相手に「正義とは何か」という議論を展開していく。以上の議論の最終局面にあたる第 10 巻において、正義の報酬の議論がなされる。その中でソクラテスは魂の真の本性をめぐる議論を行なう。その箇所を、さまざまな研究者が異なる視点から解釈している。山内友三郎は、この箇所では、魂を理知的部分・気概の部分・欲望的部分の３つに対立させる「魂の三部分説」が魂の真の本性とされているとし、クリストファー・ギル（Christopher Gill）は、これら三部分のうち、理知的部分のみになった魂が魂の真の本性にあたるとされていると主張している。これに対して、クリストファー・ロウ（Christopher Rowe）は「魂の三部分説」は魂の真の本性ではないとされており、哲人君主になるための教育を受けることで実現される、理性と肉体的欲望や感情が対立しない魂こそが魂の真の本性とされていると主張している。このように、この箇所は争点となっているのである。そこで、本論考では、以上の三人の代表的研究者たちの論をふまえながら、魂の不死証明と魂の真の本性をめぐる議論の関係、さらに、魂の真の本性をめぐる議論とエルの神話の関係に焦点をあてて、プラトンの『国家』篇における魂の真の本性とは何かという点について考察を進めていきたい。

さて、魂の不死証明と魂の真の本性をめぐる議論の内容をみるかぎり、魂の不死証明における魂論は、不死であるということ以外は未だその性質が定まっていないもののように思われる。これに対して、魂の真の本性をめぐる議論において示唆されている魂の本性というものは、身体との結びつきを含めて、魂がこうむるとされる禍いから解放された魂を見出すための探求、いわゆる「付着物」のない魂を見出すための哲学者の死後の魂を把握するという探求という二つの方法によって把握することができるようなものである。前者の探求は、人間の「思惟の力」によって可能であるのに対して、人間の能力では、死後の魂を把握することは不可能であるため、後者の探求は不可能であり、結局のところ、魂の真の本性というものは、完全な形で知ることが出来ないようなものである。ただし、魂が不死不滅であるということと、永遠不変の存在であるイデアへの希求の２つは、魂の真の本性を明らかにする上での前提条件といえる。さらに、この世で人間として生きている魂は、たとえそれが人間の中でその真の本性に最も近いと思われる哲学者のものであったとしても、「無数の悪」に満ちた「魂の三部分説」のような魂なのである。

魂の不死証明と魂の真の本性をめぐる議論については、以上のとおりである。つづいて、魂の不死証明と魂の真の本性をめぐる議論との関係、魂の真の本性をめぐる議論とエルの

神話との関係について検討したい。魂の不死証明における魂というのは、先に示したように魂が不死であるということ以外は、未だその性質が定まっていない。魂の不死証明は、魂―それがどのような魂であったとしても―の不死性を明らかにするのみである。以上のような魂の不死性を前提として、魂の真の本性をめぐる議論は開始される。魂の真の本性をめぐる議論というのは、不死なる魂の真の本性をめぐる議論ということになる。つまり、魂の真の本性をめぐる議論は、魂の不死証明において確認された魂の不死性を前提とした議論ということになる。その意味において、魂の不死証明と魂の真の本性をめぐる議論は一貫した議論を形成していると言えるのである。

つぎに、魂の真の本性をめぐる議論とエルの神話との関係についてみていく。エルの神話は、死後の魂の運命についての物語〈ミュートス〉である。なぜ、エルの神話は、それまでの議論（ロゴス）という形式ではなく、あくまでも物語（ミュートス）という形式によって語られなければならなかったのか。その理由は、議論（ロゴス）と物語〈ミュートス〉といものの性質から明らかになるように思われる。議論（ロゴス）というのは、論証による人間の認識能力にもとづいており、その意味において、人間の認識能力の限界内で把握されうる事柄を対象とするものであるといえる。これに対して、物語（ミュートス）というのは、人知を超えた神的な説話であり、論証による人間の認識能力を超えた対象を扱うものであるといえる。つまり、死後の魂というものは、論証による人間の認識能力を超えた事柄であると考えられているからこそ、それは議論（ロゴス）という形式ではなく、物語〈ミュートス〉という形式によって語られなければならないのである。

死後の魂が、論証による人間の認識能力を超えたものであるという考え方は、魂の真の本性をめぐる議論において、すでに示されている。エルの神話は、魂の真の本性をめぐる議論からその考え方を継承しているのである。その意味において、エルの神話は魂の真の本性をめぐる議論と一貫した議論を形成していることになるだろう。エルの神話において描かれる魂というのは、魂の真の本性をめぐる議論における魂の真の本性と同じように、不死性を前提条件とした魂である。エルの神話を選択し語っているのは『国家』篇の主要な登場人物ソクラテスである。したがって、エルの神話で示される魂についての考え方は、プラトンの『国家』篇における魂の真の本性を示唆しているということができるだろう。つまり、『国家』篇において、プラトンは、ソクラテスに神話という形式によって示唆的に魂の真の本性について語らせているということである。以上のことは『国家』篇に込められたプラトンの意図を理解する上で、もっとも重要であると思われる。

そこで、エルの神話について、その内容を考察することにしよう。エルの神話は大きく２つの部分に分けられる。すなわち、（１）宇宙の構造・日月星辰の天球の周期的運行の説明、および（２）として死後の世界において魂が接する事柄に関する説明である。本論考では、おもに（２）を取り上げて検証していく。

（２）の内容から考えて、魂はそれを輪廻につなぎとめている身体性を取り払われ、恩恵の場である天上に連れて行かれ、永久に帰って来ることがないという状態を最大の恩恵

として与えられることで「正義は善であり、不正は悪である」という知識を獲得し、常にそれを有し、常にそれにしたがう。つまり、肉体的欲望や感情との対立がない理性主体の魂、理性を中核とする複合体である死後の哲学者の魂が、エルの神話において示唆されている魂の真の本性でありように思われる。

エルの神話で示唆されている魂の真の本性、および、それ以前の議論における魂の真の本性というものに着目して、プラトンの『国家』篇における魂の真の本性とは何かという点について考えた場合、プラトンの『国家』篇における魂の真の本性というものは、第一に「不可知なるもの」として、明確な解答が保留されているものであると思われる。その一方において、物語（ミュートス）というレベルでは、魂を輪廻につなぎとめている身体性を取り払われ、恩恵の場である天上に連れて行かれ永久に帰って来ることがないという状態を最大の恩恵として与えられることで、魂は「正義は善であり、不正は悪である」という知識を獲得し、常にそれを有し、常にそれに従うような、肉体的欲望や感情との対立がない理性主体の魂、理性を中核とする複合体である哲学者の魂が、魂の真の本性であるということが、示唆的に語られているのである。

では、なぜ、わざわざ魂の真の本性については、一旦不可知とされた後で、そのような前提に立ちながら、物語（ミュートス）という形式によって示唆されなければならかったのか。

その理由は、魂の真の本性というものは正しく、また正義とは善であるということが、論証による人間の認識能力を超えた次元において決まっていることや、人間の認識能力を超えた次元において、哲学者の魂は間違いなく最も正しく最も善い魂であることがエルの神話において示唆されているという点などから考えると、人間の認識能力を超えた次元において、それらの事柄が定まっているということを示すためであると思われる。

さらに、なぜ『国家』篇の最後に魂の不死証明、魂の真の本性をめぐる議論、エルの神話という、大きな文脈を形成する論が展開され、その中で、人間の認識能力を超えた次元において、それらの事柄が定まっているということが示されたり、人間が「無数の悪」に満ちた状態であり、人間という性質の中で「正しくも、不正でもあり得る存在」であるということが語られたりしなければならないのか。その理由は、人間の魂は、三つの部分に分かれていて正しくも不正にもあり得るが、正しくあることが善であり、相異なる素質をもつ人々が皆それぞれに最も正しく最も善くあるためには、哲人君主が治める国家やその国家における教育が必要であることの根拠を示すためであると思われる。

以上のことから、『国家』篇は一貫した議論を構成するものなのである。その議論というのは、人間とは何なのか、素質がそれぞれ異なるような人間はどのようにすれば皆がそれぞれにとって最も正しく最も善くなれるのかといったことを対象とした、この世に生きる人間に関する議論である。そして、そのような『国家』篇においてプラトンが意図しているのは、哲人君主が国家を支配することの正当性を根拠付けることである。『国家』篇の終幕部分において、魂の真の本性が示唆的に語られているのは、以上の理由からである。